

英米文学における人間探求

— D・H・ロレンス論を中軸として —

山崎進著

英米文学における人間探求

—D. H. ロレンス論を中軸として—

他 W. ブレイク
W. ホイットマン
R. ジェフリズ
K. マンスフィールド
J. スイフト
の各論

白鳳出版社

著者略歴

山 崎 進

明治44年兵庫県に生まれる。
京都大学文学部英文学科卒。
現在 姫路工業大学名誉教授。
同大学・神戸学院大学講師。
著作 D. H. ロレンス「処女とジプシー・太陽・盲人」（大阪教育図書刊）R. ジェフリズ「心の旅路」（関書院刊）その他。
現住所 ㊟670 姫路市竜野町6丁目41

英米文学における人間探求 —D. H. ロレンス論を中軸として—

昭和57年2月25日 初版第1刷印刷・発行
昭和61年3月1日 印刷・発行

定価 4,800円

著 者 山 崎 進
発 行 者 白 川 薫 久
印 刷 者 チ ュ ー エ ツ

発 行 所 白 鳳 出 版 社

本 社 ㊟541 大阪市東区瓦町1-6 ヒガシビル503号
TEL 大阪 06(229) 1690 番
企画室 TEL 大阪 06(872) 2747 振替大阪 5-302062

（落丁・乱丁はお取りかえいたします。）

I S B N 4 - 8 9 1 7 8 - 3 0 1 - X C 3 0 8 2 ¥ 4 8 0 0 E

序

私は生と死の間をおろおろとして右往左往している「人間」である。私は喜び、悲しみ、嘆き、怒り、墮落し、他を貶し、欲求不満にもだえながら生きて行く。自己の内的意識の螺旋階段を降りて行って、暗黒の深淵の中をさまよいたゞようこの私の姿は亡霊のようにすさまじい。天国と地獄、霊と肉、善と悪、理性と感情、個と社会の間を^{つぎ}躡きながら、よりどころもなく、やがて死に直面する私。まことにモームの言うように「矛盾だらけのさまざまな性質をごっちゃに束ねたまゝのもの」(a haphazard bundle of inconsistent qualities)である私。この私という「人間」とは一体何であるのか。不可解な私という人間存在の本質を少しでも解明してくれるものはないのか。たまたま文学の道に足を踏み入れていた私は、その解明の糸口を主として文学の道に求めたのは、けだし当然のことであった。なんとになれば、かのホイットマンが‘Camerado, this is no book. / Who touches this touches a man.’「同志よ、これは書物ではない。／これに触れる者は人間に触れるのだ。」と歌った如く、文学とは正に「人間」であるからだ。尤も人間の本質を探索するためには文学のみに限ったことはない。哲学、科学、歴史、宗教等、少くとも人間を対象とした分野はいくらでもある筈である。が、文学は人間解明の重要な手がかりであることには間違いはないと思う。そこで、私にとって偶然も必然もからめて、次の英米作家の文学研究によって人間存在の本質を探索しようと試みた。即ち、J. スイフト (1667—1745), W. ブレイク (1757—1827), W. ホイットマン (1819—92), R. ジェフリズ (1848—87), D. H. ロレンス (1885—1930), K. マンスフィールド (1888—1923) 等である。その中で特に私の関心を引いた文学者は D. H. ロレンスその人であった。彼は、脳髓の表皮が肥大して跛行的非存在化した人間を、純粋な宇宙の生命の泉に浴せしめて、無機化した個を再生せしめるために、霊と肉とのすさまじいまでの闘争の極限状態を展開し、真の人間性の根源的、宇宙の生命を徹底的に追求することによって人間の全身全霊を根底からゆさぶる生命感を私に喚起させると共に、彼の思想が窮極的には、ある意味において東洋的、禪的思想へ傾斜する（特に *The Plumed Serpent* 参照）のを認めたからであった。本書において彼に関する研究が占める比重が、他の作家のそ

れに比較して、より以上に重い結果になったのは、主としてその理由によるものであって、いわばこの著作の中軸をなしている。したがって D. H. ロレンス論を本著作の第一部に位置づけた次第である。次にロレンスの根源的母胎は、W. ブレイクの人間観、世界観であり、それはまた、W. ホイットマンにも受け継がれている。即ち、W. ブレイクから W. ホイットマンへ、そして D. H. ロレンスへとその文学的血統が流れている。それ故に、私は W. ブレイク、W. ホイットマンにも研究の照準を当てて、主体の人間性の探求を試みた。即ち、W. ブレイクにおいては、彼の人間形成のあり方をその詩作品等を通じて考察し、W. ホイットマンにおいては、人間解放と詩の解放とに分けて考察した。また、R. ジェフリズにおいては、ロレンスがその手紙等でジェフリズのことについて共感しているのだが、彼の場合、ロレンスが「肉」を根源として人間存在を追求するのに対して、彼は「霊」を根源として人間の実体を探求しているのであるが、窮極的に両者とも霊肉一致の清浄で太陽の宇宙的生命としての全人的統一姿態を創造するのである。本論においては、自然、宇宙の神秘的深奥にまで自己の霊的全生命を投入させて把握した 'Deepest Soul-Life' について考察した。次に K. マンスフィールドにあっては、その精緻で詩的な感覚故に、傷つきながら苦悩を母胎として生きぬいて行くその宗教者的存在を、彼女の詩その他の作品を通じて考察を試みた。最後に J. スイフトにおいては、人間を悪魔的本質を持つ Yahoo 的存在として生命の底辺にまで引きずり降している点は正にロレンス的であるが、本論では、彼の天国と地獄との間をゆれ動き苦悩する偉大な平凡人としての人間スイフトの一面を考察した（英文の都合等から、本書の最後においた）。以上の5人の作家論によって本書の第二部が構成せられている。

これを要するに、矛盾撞着する私という「人間」の原点から出発して——まことに素朴な視点ではあるが——根源の人間存在の様態を、ロレンスの中軸とした6作家の文学研究によって探求しようと試みたと言えよう。したがって、この論叢は、私という人間がたどって来た精神的遍歴を、おぼろげながらも指向していると考えられそうである。その点においてこの著作は、おろかな私という人間の再生であると共にその墓碑でもとも言えよう。

なお、本書を形成する諸論文の掲載誌、発行年月等は次の通りである。——ただし、本書作成に当って、ある程度体裁を整えるために、原論文名を多少変えたこと、

また相等過去の年代の論文があるため、日本語の用語をなるべく現代の用語に改めたこと、その他内容等の表現において不適当と思われる箇所は最小限度変えたことをここに断わっておくと共に、論文の中には（特に相等年代を経た論文において）、稚拙な点も見られるが、それはその当時の私のおろかさ（勿論、現在、未来も、そのそしりを免れない。）を素直に認めることとしてそのままにしておいた。なお、各論文作成の当初は、一冊の著書にするような考えはなかったので、全体的に見て、さまざまな面において一貫性を欠き、不統一の点が見うけられるが、これもやむを得ないこととしてそのままにしておいたことを断わっておく。

第一部 D. H. ロレンス論

Sons and Lovers <京都大学大学院談話会にて発表（1939. 5）, ALBION（京大英文学会）VOL. VII, No. 3（May 1940）所載「‘Sons and Lovers’に就いて」>

The Rainbow <姫路工業大学研究報告, 工学合併号1号（1951. 3）所載「D. H. Lawrence の人間実存に就いて——作品 ‘The Rainbow’ の考察を中心として——」

「ニルヴァーナ」の問題 <京都大学大学院談話会にて「D. H. ロレンスの人間観」と題して発表（1951. 5）, 姫路工業大学研究報告（一般教育関係）第2号（1953. 4）所載「D. H. ロレンスに於ける『ニルヴァーナ』の問題」>

Women in Love に流れる三思潮 <姫路工業大学研究報告 No. 16. B（1966. 10）, No. 17. B（1967. 10）所載「*Women in Love* に流れる三思潮——『死にいたる恋愛』『生にいたる恋愛』『血盟』——」>

The Plumed Serpent——新しい共感帯の探求—— <姫路工業大学研究報告 No. 22. B.（1972. 10）所載「新しい共感帯の探求——*The Plumed Serpent* の一考察——」>

視覚と触覚の問題——『いちじくの葉』以前の境位への回帰—— <姫路工業大学研究報告 No. 24. B.（1974. 12）, 創立30周年記念号所載「ロレンスにおける視覚と触覚の問題——『いちじくの葉』以前の境位への回帰——」>

第二部 その他の作家論

W. ブレイクにおける人間形成の一考察＜姫路工業大学 研究 報 告（一般教育関係）No. 9（1959.12）、創立十周年記念号所載（同表題）＞

W. ホイットマンにおける現代的意味＜姫路工業大学研究報告（一般教育関係）第五号（1956. 1）所載（同表題）＞

R. ジェフリズの 'Deepest Soul-Life' について＜ALBION（京大英文学会）VOL. VI, No. 5（March 1939）, VOL. VI, No. 6（May 1939）所載（同表題）＞

K. マンスフィールドにおける人間形成の展開——詩を中心として——＜季刊「もんもんど」（門土社）3号（1979. 6）所載（同表題）＞

〔注〕 彼女の詩については、かつて「キャサリン・マンスフィールドの詩（紹介）」と題して、西条八十主宰「蠟人形」第8巻第9号（昭和12年9月）に掲載しているが、この論文中の訳詩等にその大半が含まれているので割愛することにした。

A Study of J. Swift——Not as a Genius, But as an Ordinary Mortal——（英文）＜姫路工業大学研究報告 No.13. B.（1963.12）所載（同表題）＞

〔注〕 該論文は著者の京大卒業論文 'Animalism of J. Swift' を基底としたものである。

最後に、各論文作成及び本書編集に当っては、先輩学者諸賢から貴重なご教示を仰ぐとともに、各作家の写真を研究社英米文学辞典（斉藤勇編）から拝借した。ここにそのご教示と写真拝借に対し、謹んで深く感謝する。なお、本書の出版をご快諾下さった白鳳出版社社長白川薫久氏に対し合せて心から謝意を表する次第である。

昭和57年2月

山 崎 進

目 次

序

第一部 D. H. ロレンス論〔1〕

はじめに：ロレンスの霊に献げる詩——

マトゥラーの彫刻 著者作詩

1 *Sons and Lovers*〔1〕2 *The Rainbow*〔21〕

I 人間存在と性〔21〕

II Tom と Lydia の性愛〔27〕

III Anna と Will の性愛〔36〕

IV Ursula と Skrebensky の性愛〔40〕

V 虹——永遠〔45〕

3 「ニルヴァーナ」の問題〔49〕

4 *Women in Love* に流れる三思潮〔78〕

I 死にいたる恋愛〔78〕

II 生にいたる恋愛〔99〕

III 血 盟〔124〕

IV 結語〔142〕

5 *The Plumed Serpent*〔145〕

——新しい共感帯の探求——

I 本小説の思想的核〔146〕

II Kate の西欧脱出の原因〔147〕

III 新しい世界創造の構想〔149〕

IV Kate の自我変革〔153〕

1 Kate の自我変革の基底となる実体の種々相	[153]
a) Quetzalcoatl について	[153]
b) The Dark Sun について	[156]
c) Indian について	[159]
d) 時の観念について	[166]
e) 生命力の宿るところ	[167]
f) 血は一つ——男は血の柱, 女は血の谷	[169]
2 Kate の自我変革の過程	[170]
V 結論——新しい共感帯の東洋的思想への傾斜	[179]
6 視覚と触覚の問題	[182]
——「いちじくの葉」以前の境位への回帰——	
第二部 その他の作家論	[209]
1 W. ブレイクにおける人間形成の一考察	[209]
2 W. ホイットマンにおける現代的意味	[242]
I 人間解放	[243]
II 詩の解放	[276]
III 結 語	[281]
3 R. ジェフリズの 'Deepest Soul-Life' について	[283]
4 K. マンスフィールドにおける人間形成の展開	[308]
——詩を中心として——	
5 (英文) A Study of J. Swift	[333]
——Not as a Genius, But as an Ordinary Mortal——	
Introduction	[333]
Chapter I Swift's Thoughts on "Woman"	[335]
Sect. I The True Colours of "Yahoo"	[335]
Sect. II His Thoughts on "Woman"	[337]
Sect. III His Physiological Thoughts on Love	[344]

Sect. IV	My Opinion on Swift's Thoughts on Love ...	{348}
Chapter II	Swift's Thoughts on Civilization	{353}
Chapter III	The Reasons Why Swift comes to embrace "Animalism"	{366}

1 *Sons and Lovers*

J. M. Murry 氏が、その著書 *Son of Woman* において、*Sons and Lovers* を ‘the life of a man’ と称し、また、Lawrence の初恋の女性であり、彼の詩を *The English Review* に送り、Ford Madox Hueffer の認めるところになり、それ故に、彼の Literary Début の契機となしめたところの E. T. 女 (*Sons and Lovers* では Miriam, 実名は Jessie Chambers。)がこの書を ‘autobiographical novel’ と称している如く (*D. H. Lawrence by E. T.*, p.190.), まさに Lawrence の生涯の歴史が、そのまま、彼の芸術となって表現せられる。彼においては、真に「生きる」ことが最も大切であって、そしてそのために盛り上ってくる人生の苦悩がほとばしり出て、彼の文学となる。それ故に、彼は「芸術以前」をその強烈な自意識の^{るつぼ} 坩堝の中に沸騰させ、そしてその器から噴出した飛沫が彼の文学となったと言えるだろう。我が国の俳聖芭蕉は「きのふの発句はけふの辞世、今日の発句はあすの辞世、我世涯云捨し句々、一句として辞世ならざるはなし。……」と語ったと伝えられる如く (花屋日記, 岩波文庫, p. 24), のっぴきならぬ生活の苦悩から吐き出される詩こそ、地の塩であらねばならぬ。それ故に、この作品は、単なる恋愛のための恋愛をテーマとしたものではなく、その背後には、測り知れない宇宙的思想が泥土の中から萌芽し、緑葉を生じ、幹を創り、頹敗せる人間を^{へいげい} 睥睨して新しき人間の開花を期せんとしているのである。彼の sex は、直接人間の改革と結び、進んで社会改革と結合するものであって、彼が ‘Du bist wie eine Blume!’ なる過去の文学を、人間への^{ぼうとく} 冒瀆として排斥する所以でもある。偉大な artist が、しばしばそうであったように、彼もまた、孤独の中に身をさらし、社会の俗人から遠く離れて、自己の血でもって理想の烽火を上げつつ、行動し続けたのであ

る。そして、かゝる宇宙的な思想の生^{なま}のまゝに沈澱しているのがこの *Sons and Lovers* である。それ故に、我々は、この吐き出された沈澱物を少しなりとも地の塩として取り上げてみたいと思う。

I

殆んど自叙伝に近いところの *Sons and Lovers* は、先ず息子の生前における母と父との争闘を描き、そうした環境に影響されつつ、成長して行く息子の幼年期における母との愛情の交渉の重大性を示し、幼い男子の Oedipus Complex から発展していった、青年期になるに従って、Lawrence 自身の愛欲の苦悩を描き、最後に母の死によって彼女の bond から逃れ、ここに最初の脱皮が完成されるその過程を示している。

彼の現実における経験の過程においても、この書と大体同様であって、次に該書が作られるその当時の模様を略述しよう。Lawrence は当時、愛する母と死別し、恋人 E. T. 女 (Jessie Chambers のこと。 *Sons and Lovers* では Miriam) 及び 'the auburn-haired teacher' (D. H. Lawrence by E. T., p. 177—*Sons and Lovers* では Clara) とも別れ、彼にはもはや自己を束縛する何物もなく、視界は開け、新しい人生が眼前に現われたので、初めて過去を批判し、過去を吐き出して new self に向かって進むべき時が来たのであった。

そこで彼は *Sons and Lovers* を書き始めた。1911年のことであった。例の如く絶えず文学によって交渉を続けていた彼の恋人である E. T. 女 (前出) にその原稿を見せて、彼女の批判を参考としていた。その当時 *Sons and Lovers* は 'Paul Morel' という題であったのであるが、その内容において、劇的な生涯を綴って夭折する Lawrence の兄 Earnest (*Sons and Lovers* では Paul の兄 William) の事件が省略せられていたので、それを内容の中に書き入れるようにすすめたのも彼女であった。その彼女が読んで

驚いたのは、ひどく彼女を痛めつけ、Lawrence の母に勝利の月桂樹を冠していることであつた。

さすがに Lawrence 自身も、こうしたすげない自分の態度に対して少なからず恥じたらしく、彼女に対して非常な同情を寄せているように見えた。ところが彼女の悲しみはこれだけではなかつた。この事によって Lawrence の彼女に対する心を知り、悲歎にくれていた彼女に最も恐るべき事件が知らされるにいたる。

以前、彼が Nottingham の college に在学中、言語学者の Professor Earnest Weekley と親しくなっていた (*The Savage Pilgrimage* by Catherine Carswell, p. 7.)。教授は彼にフランス語を教えていて、彼がすぐれた頭脳の持主であることを知っていた。そして今度、彼が詩人として噂されているのを聞いて教授は彼を家庭に招じた。そこで初めて、教授の夫人で Lawrence より年上の Frieda に会うが、この最初の彼女との会合によって、彼のとるべき道は決定したのであつた。Frieda は Baron von Richthofen の娘で、彼女が Earnest Weekley と結婚したのは20才にもならぬ未だ少女時代のことだった。Lawrence が彼女に会った時は、既に一男二女の子供の母で、いわゆる、上流階級の人生には未経験の、不幸が何であるか知らないといった女性であつた。それ故に彼女は、Lawrence によって初めて自分というものを知り、人生をも知り得たといつてよいのである。そこで Lawrence と Frieda は、彼女の故郷であるドイツへ逃避する。この事を知らされた E. T. 女 (Miriam) が、ショックを受けずにおられないのは当然である。彼女は次の如くその当時のことを述懐している。

In the passing of Lawrence I saw also the extinction of my greater self. Life without him had a bleak aspect. I had grown up within his orbit, and now that he was definitely gone I had

to make a difficult new beginning. For a long time in a quiet and deliberate way I wished I had done with life. (*D. H. Lawrence* by E. T., p. 21f.)

しかし、彼女にしてみればまた、彼との長い恋愛から生み出された苦悩からたち切れる時が来たのである。Lawrence から 'I cannot find that I love you as a husband should love his wife.' (*ibid.*, p. 66.) の如きことを言われ、また、'Look, you are a nun, I give you what I would give a holy nun. So you must let me marry a woman I can kiss and embrace and make the mother of my children.' (*ibid.*, p. 139.) と書かれ、また、息子を捕られまいとする母から憎悪をもって見られ、幾多の苦悩をしのんで来た彼女にとっては、これは一つの悪夢であるに違いない。それ故に今、Lawrence の方から別れてくれたことによって、彼女は過去から解放せられ、自由を取りもどしたと言えよう。彼女は 'your news does not surprise me. I had expected it. In my heart I am glad, because it sets me free.' と手紙で返事をしたのである。

このような Lawrence の行動は、常識的な既成道德の規準からみれば、決して許されそうにもないし、事実 E. T. 女の書いたもの (*D. H. Lawrence* by E. T.) を読んで、彼女に同情し、Lawrence の利己的な態度を怒らずにはおれない。しかし、また、恋愛を食いつつ、そこから発散し、凝固した daemon によって人間の信念の恢復に烽火を上げた Lawrence にとっては、E. T. 女の如き犠牲もまた己むを得ない事であったのであろう。

さて、フリーダを教授から奪った Lawrence は、別々にではあるが、書きかけの *Sons and Lovers* の原稿をたずさえて、しかし、Erieda との恋愛故に苦悩を続けつつ、ライン河畔や Trier や Mayrhofen の地方を流れ歩いた。そして第二作の *The Trespasser* からの印税によって、彼はよう

やく旅費を得ていたのであった。それから、彼女と Lawrence とは、夏のある日、徒歩で Tirol から Italy へ入った。かくして、1912年秋、冬、翌年の早春まで Lake Garda にとどまった。そして二月 *Love Poems and Others* を世に出し、同年遂にこの *Sons and Lovers* を出版した。その結果は、‘The reviews were mostly favourable. Some were enthusiastic.’ と Catherine Carswell は書いている (*The Savage Pilgrimage* by C. Carswell, p.10.)。

II

さて、かくの如く、彼の自叙伝とも称すべき *Sons and Lovers* について、先ず起こってくる問題は、母と子に対する愛情の問題である。しかし、この問題の由ってきたる原因は、子の生前にまで遡らねばならぬ。即ち、*Foreword to “Sons and Lovers”* において Lawrence の解説するところにしたがえば、先ず神は、女の肉体において彼自身を取りもどす。そして、女の肉体より彼は次のように命令する。「私のこのものを表現にまで運べ」と。「どの女も、それぞれの性格に従い、日中になした仕事の歓喜と疲労とをもって、男が彼女にかえり来るべきことを要求する。彼が彼女と共にある間、彼女によって更生し、朝にはまた新しい力をもって、出掛けて行くべきことを。」(研究社現代英文学叢書 *Sons and Lovers*, 土居氏訳。)

ところが、夫 Morel は教養のない、そして感覚的で、本能的な炭坑に働く労働者であるのに反して、彼女は清教的なインテリ階段に属する女性で、宗教、哲学、政治について議論することの好きな女性である。かくの如く、二人の性格の相違は、お互いが自己の性格の領域以外にあるために wonderful に感じ、どちらも自分より以上の或る神秘的な美をもって迫るのは当然であり、それ故に彼等二人は結婚したのであるが、次第に月日が経過するにしたがい、根底に横たわる二人の性格の相違によって彼等は反発し合い、

次第に距離をへだてて離反して行く。そこで、彼女は彼女の男をとり戻そうとして、闘争することに消耗させられる。彼女は嘗て愛していた夫に対して、その清教的宗教心で夫の不行跡を責めた。が、彼女は彼を彼たらしめないで、彼以上のものにしようとし、また、彼女がかくあるべきだと理想とする男に仕上げようとして却って彼自身を台無しにし、彼女自身も傷つけられて行く。かくして、彼女は貧困と醜惡と下劣のために戦って来たのであったが、こうした状態のもとにあって、第三児 Paul (Lawrence 自身) が生れようとしている。もはや、母と父には愛情がなかった。愛なくして子どもを生むことは sex への冒瀆であり、人間に対する冒瀆である。それ故にまた、その子どもに対する罪惡でもある。その上、彼女は貧困と醜惡と下賤に対して戦い、もはやこれ以上堪えることはできない。第三児を生むことは、みじめな彼女がより一層足場ない深みに突き落されることであった。それにもかかわらず子どもを生む。これは、しかし、彼女の罪である。それ故に、彼女はその子どもを愛なくして世の中に出したことについて、明らかに自己の罪を認める。そして、その子どもを彼女の愛情のすべてを投げ打って育てて行こうと決心する。この点においては、彼女としては最善をつくしたと言える。しかし、ここに一つの問題がある。彼女は夫を輕蔑し、憎惡し切っているが、夫から閉めだしを食うと、それに驚き、やはり彼に従属している。妻が常にその夫に対して幻滅を感じ、極度に輕蔑しているのならば、何故に自ら進んで離別しないのか。「人形の家」の女主人公がその夫と家とを捨てた如くに、Morel 夫人も捨てないのか。彼女は夫と離れては、自活する道を知らない。また、夫を見捨ててしまう程にもなれない。そして、それ程に高邁な精神を持ってはいない。それ故に、このノラ以前の女は夫を憎みつつ、夫から離れられないで、愛の対象を夫から子どもに向けて行く。しかも、彼女はいわゆる中流階級の持つなまぬるい幸福を目的に生きて行こうとする。Lawrence が彼女から離れていった一つの原因として、この母をもって代表される中流

階級の思想があげられる。Lawrence である Paul はこの点において、彼女に反対し、その微温的な考え方を憎み、真に生きるためにはたとえ外面的に不幸に見えても、内に充実した生の炎を燃やして行くことを欲する。

そして、本能的で原始的な父のその本性と宗教的で精神的な母のその本性とを受けついだ子どもである Lawrence は、あたかも、その父と母とが現実において血みどろな闘争を演じている如くに、彼の心の中でその肉体と精神とが相い争い、食い合い、そして、その泥土の闘争を通じて Lawrence 自身が純化し昇華して行くという事も合わせ考えられると思う。

かくして、Paul の生前における父母の争いが、母をして父を捨てしめ、やがて生れた子どもに向かって自己の愛の完成を要求するに至る。‘I’ve never really had a husband.’ と母は息子にささやく。そして息子は真に彼女の恋人となり、彼女の精神、肉体から受ける情熱によって男となる。息子は父に代わって母の man となったのである。しかし、概ね、彼の母に対する感情は spiritual なものであり、その早熟さも ‘spiritually precocious’ であるに違いない。そこで、彼が母を通じて獲得した女性への異状な愛は、すくなくとも Lawrence においては、幼少時代から、否、母の胎内にいる時代から発展していたのであって、彼が肉体において virginity を保ったのは23才迄であったが、精神的にはそれよりはるか以前に man となったのである。

しかし、こうした愛情が若き男の肉体を苦悩に満たして行くことも十分に考えられる。

Paul loved to sleep with his mother. Sleep is still most perfect, in spite of hygienists, when it is shared with a beloved. The warmth, the security and peace of soul, the utter comfort from the touch of the other, knits the sleep, so that it takes the body and soul completely in its healing. Paul lay against